

Weekly Michael's News

2017年4月17日発行 No.32

<今週の聖句>

『婦人たちは、恐れながらも大いに喜び、急いで墓を立ち去り、弟子たちに知らせるために走って行った。すると、イエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱きその前にひれ伏した。』
(新約聖書 マタイによる福音書 第28章8~9節)

<受難週、特にイエスの苦しみを覚える受苦日に行われた「十字架の道行」礼拝!!>

昨日は、イエスの復活を祝う「イースター」礼拝が世界中のキリスト教会で行われましたが、先週はその喜びにつながる特別な週である受難週、特に金曜日はイエスが十字架にかかった「受苦日」として、その歩みを覚える日となっていました。KIUチャペルでも、イエスの苦しみを描いた14枚の絵「十字架の道行」が掲示され、金曜の昼礼拝はいつもの奨励形式ではなく、聖書朗読と聖歌、そして祈りが中心となった「受苦日礼拝」を行いました。

スーパーのセールやテーマパークのイベントにも「イースター」の文字が見られるようになった昨今ではありますが、その喜びの根底にある、イエスの受けられた痛み、そして自らの使命に向き合う生き方をしっかり覚えたいですね!!



チャペルの雰囲気を変える絵の数々

<輝く瞳に映る大きな希望!! 5名の留学生を迎えて経済学部 国際別科の入学式を挙行!!>

先週の土曜日に、チャペルでは「もう一つの入学式」が行われました。神戸国際大学は様々な国の留学生を受け止めていますが、その中で専門分野の研究に欠かせない高いレベルの日本語を学ぶ「国際別科」があります。そこにベトナムから3名、中国から1名、フィリピンから1名、計5名の留学生が入学しました。下村学長は、その式辞の中で「自分を支えてくれる存在を覚えつつ、積極的な姿勢で学びのチャンスを生かして欲しい」と、ご自分の留学経験も交えつつメッセージを語られました。物騒なニュースが世界を席卷しているこの時代にあって、留学生を迎えられる事は、本当に大きな恵みであり、大切な平和の架け橋でもあるように思います。今回入学された留学生のみなさん、本当におめでとうございませう!! 皆さんの学びの上に、主の祝福と導きが豊かにあるよう心から祈ります!! キリスト教センターにも遊びに来てね~(^o^)/”



緊張した面持ちで迎えた入学式



穏やかに歓迎の意を表す下村学長



春風が入学の喜びを華々しく彩る

＜先週のメッセージ＞

※ここでは実際に話されたお話の要約を掲載しています

4月10日（月）

野間 光顕（チャプレン）

新年度を迎え新しい歩みを始めている人を多く見掛ける。同時に「春の歩み」で連想するものに桜前線がある。麗らかな春の訪れを告げる桜、この淡い花びらの色がどこから生まれるのか？京都を代表する染色家の志村ふくみさんによると、黒っぽいゴツゴツした桜の木の皮、咲く直前の皮を取ってきて薄く切って染めると、上質の美しいさくら色が取り出せるそうだ。特に冬の寒さが厳しければ厳しい程、桜色の美しさが増すように感じられると語る志村さん。冬の寒さを耐えて咲く桜の花、その恵みが、新しい歩みを始める一人ひとりに希望と力を与える事を願う。

4月11日（火）

山口 宰（経済学部）

新学期、新しい歩みを始める時に想起する場所、それがアメリカ西海岸はシアトルの観光名所「Pike Place Market」だ。ここには4つのポイントから成る哲学がある。まず第一に「遊ぶ（Play）」…仕事は真剣に、しかし楽しむ事を忘れない。第2に「人を喜ばせる（Make Their Day）」…労働者とお客が共に楽しめる方法を模索する。第3は「注意を向ける（Be There）」…求められる瞬間を逃さぬよう油断なく周りに気を配る。そして最後が「態度を選ぶ（Choose Your Attitude）」…仕事そのものは選べなくても、どんなふうに仕事をするかは自分で選べる。常にポジティブな姿勢で入社するように心掛ける。この哲学は今や、市場だけでなく世界的企業や、医療や福祉の現場などでも提言されている。人生は、全てが自分の思い通りになる訳ではないが、その方法を選択するのは私たち一人ひとりだ。今日の聖句にもあるように、我々の内におられる神が導かれる人生を喜びと共に歩んでいこう。

4月12日（水）

近藤 剛（経済学部・キリスト教センター長）

宗教改革 500 周年を迎えた今年、「周年」とは何かを考えさせられた。ちなみに 400 周年は 1917 年、第一次大戦の最中であった欧州は、宗教改革のメッセージを宗教的・文化的闘争に利用し、戦争の大義を宗教から引用する事で混迷は更に深まって行った。現代はどうだろうか？目まぐるしく変化する世界の枠組み、自国の利益を最優先させ、排外主義が趨勢を誇っている。そのような中で迎える 500「周年」では、これまでの反省とこれからの歩みを検証する機会としなければならないのではないかと？

我々が集う神戸国際大学も、来年 50 周年を迎える。大学の土台である建学の精神と使命をどのように実現してきたかを踏まえつつ、歴史と伝統、そして展望を祈りつつ見出して行きたい。

4月13日（木）

石原 正彦（キリスト教センター主務）

新しい年度を迎えて、フレッシュな気持ちを感じている。そんな時、皆さんに今日のテーマ「今年はどうなる一年？」という問いを投げかけてみたい。私はこれまでの勤務先でも、3 年を区切りにして毎年違った課題を自分に課すようにしてきた。1 年目は「新しい現場に慣れる」…「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥」という言葉がある。1 年目は分からない事だらけで当たり前。恥ずかしがらずにどんどん周りに質問しよう。2 年目は「自分からやる」…惰性で過ごさず、自分から動き出す積極性を大切にする。3 年目は「アイデアや課題を整理する」…自分らしさを発揮するためにチャレンジする姿勢を大事にしたい。ここは大学、4 年目に卒論や国家試験など更なるゴールがあるが、今日の2つの聖句にも示されている希望を覚えながら共に歩みたい。

4月14日（金） ※この日はイエスが十字架につけられた聖金曜日（受難日）。それを踏まえて、イエスの苦しみを想起する「十字架の道行」礼拝を行いました。（文責：野間 光顕）